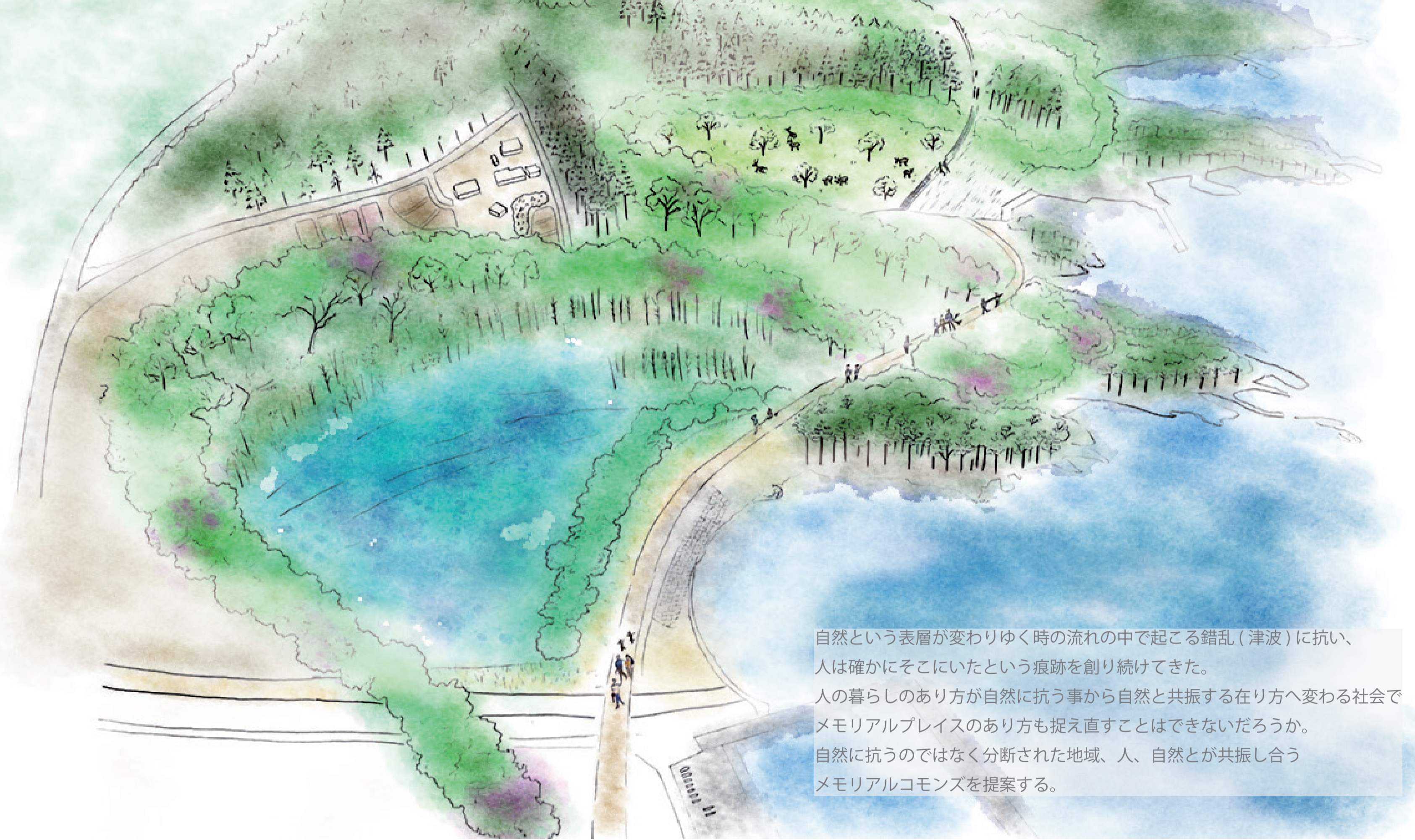
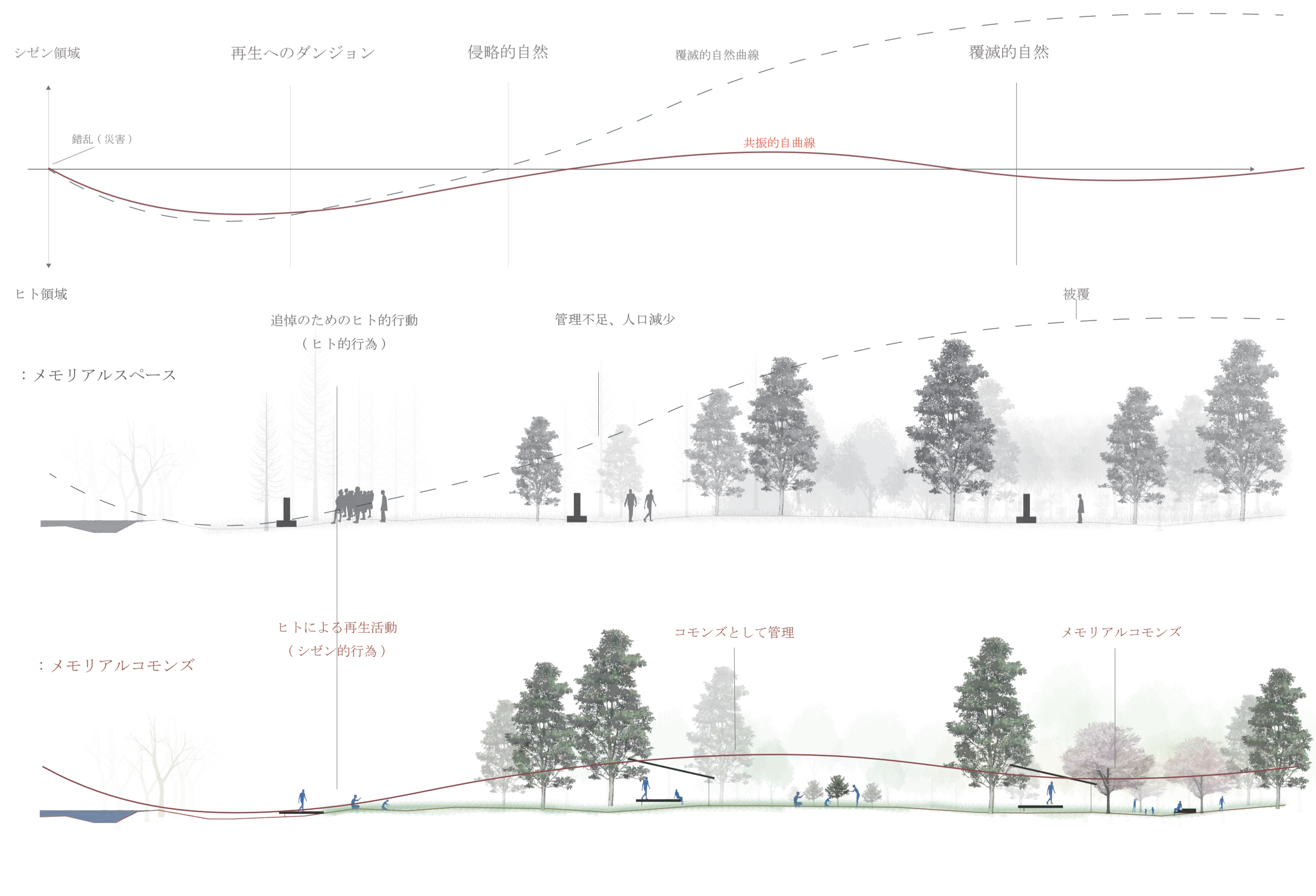
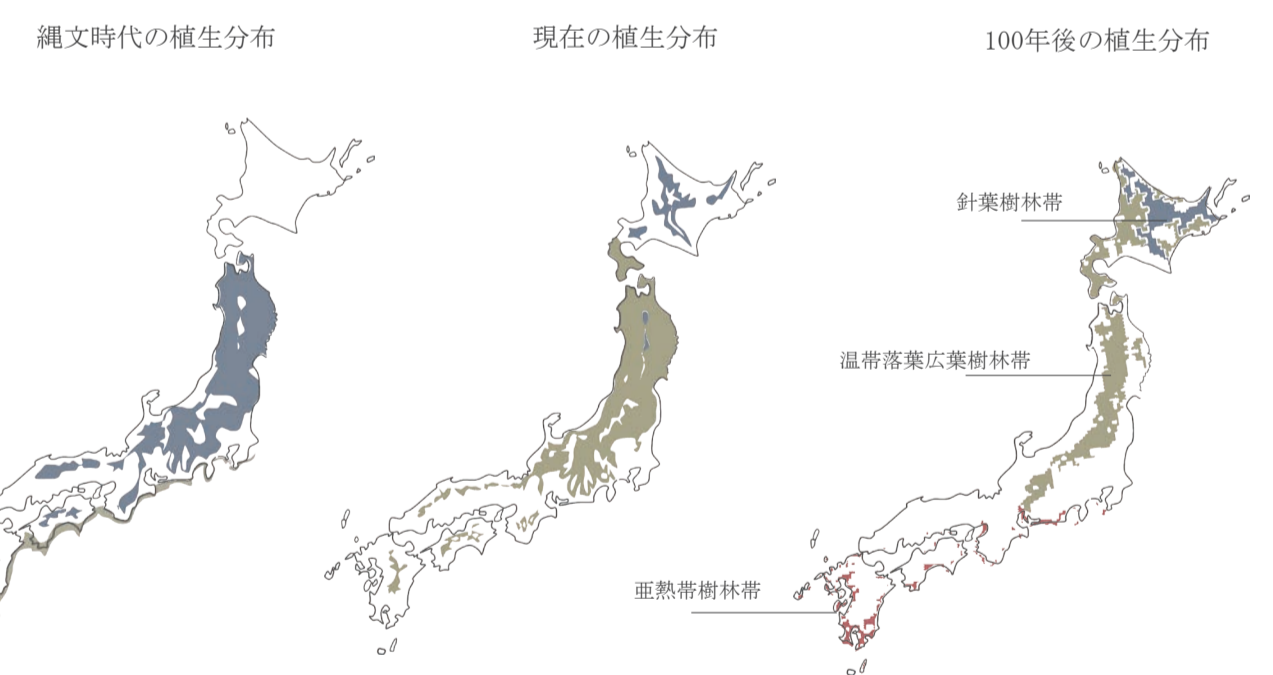


共振叢地

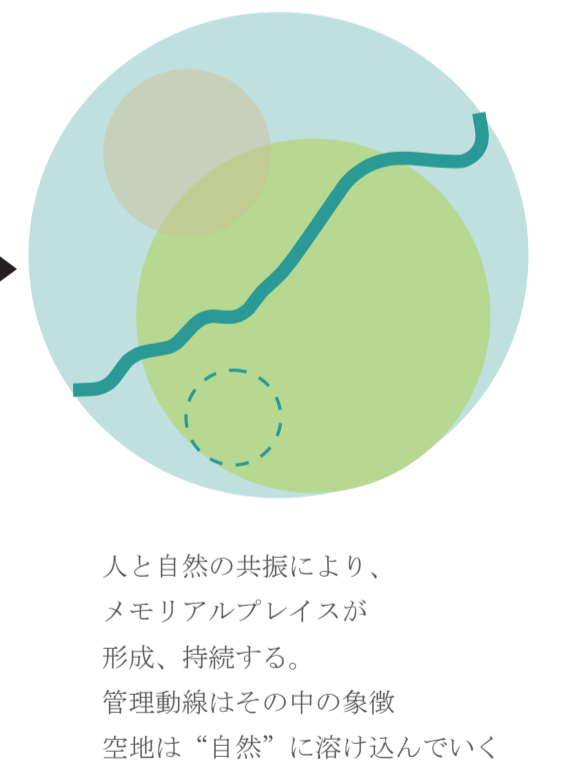
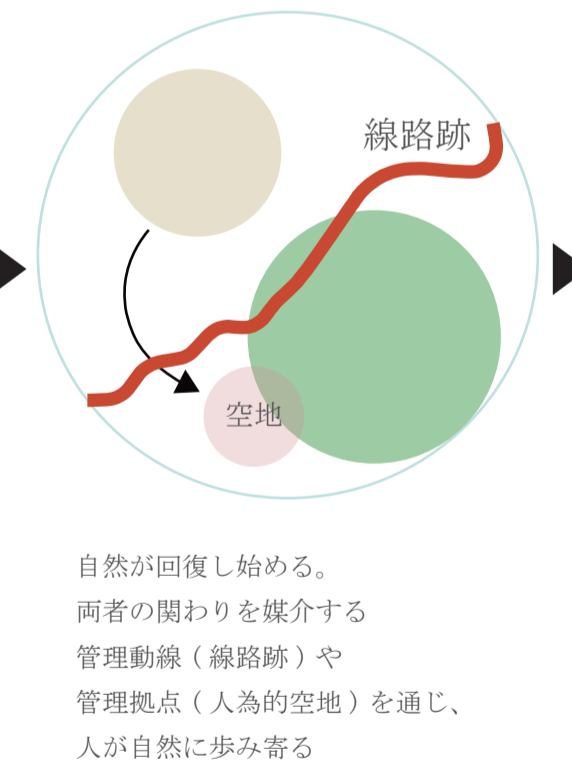
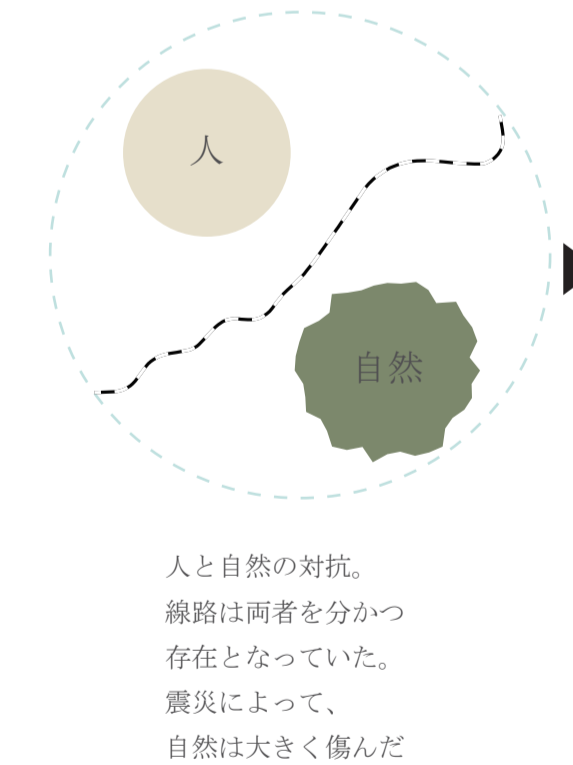
ヒトとシゼンのメモリアルコモンズ



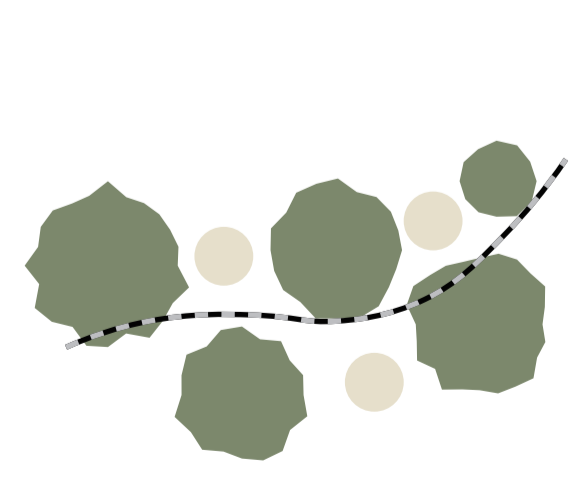
自然という表層が変わりゆく時の流れの中で起こる錯乱(津波)に抗い、人は確かにそこにいたという痕跡を創り続けてきた。人の暮らしのあり方が自然に抗う事から自然と共振する在り方へ変わる社会でメモリアルプレイスのあり方も捉え直すことはできないだろうか。自然に抗うのではなく分断された地域、人、自然とが共振し合うメモリアルコモンズを提案する。



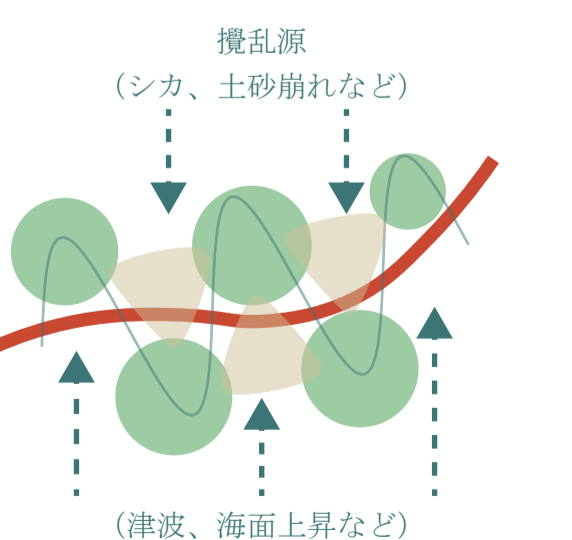
震災による地域の衰退



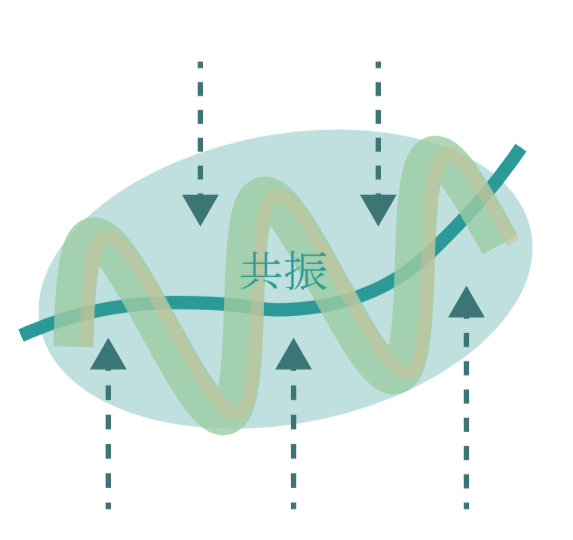
メモリアルプレイスとしての地域



対象地の現状における、傷んだ森林の野生化。住民はそれらの間に点在し、野生化を制御することはほとんどない



線路跡を管理動線とし、各森林の遷移を一部制御する。自然の擾乱を受容しながら管理活動を続けることにより、森林や住民同士の連携が強まる

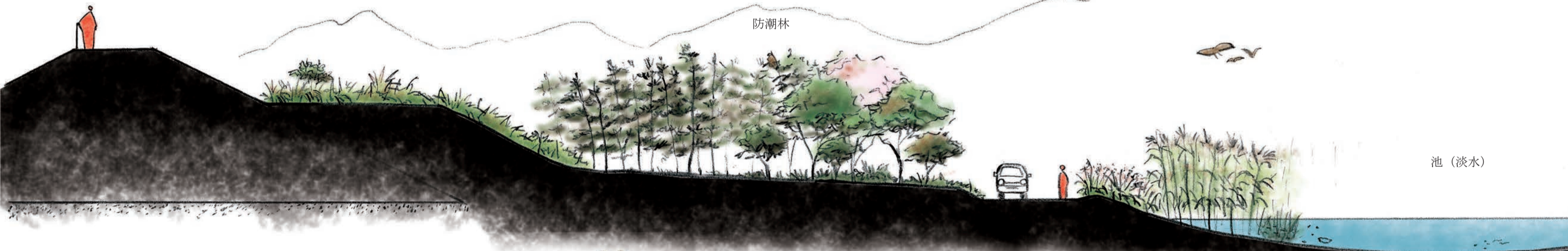


継続的管理による再自然化を通じ、住民と森林が寄り添う(共振する)。自然の擾乱が起こっても、それを受容・吸収するようなレジリエンス性をもつ地域となる



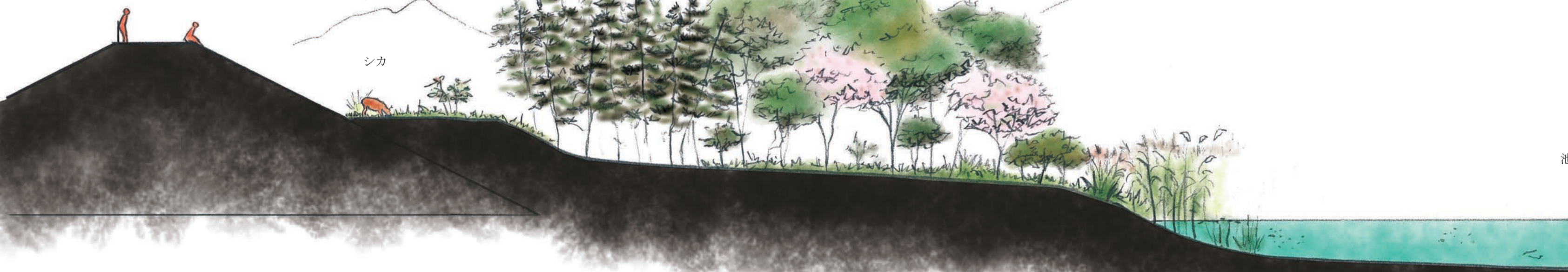
□20年後
防潮堤を浜堤が強化されたものとらえ、放棄水田の後輩湿地を掘り下げ川の水を引き池をつくる
同時に、池の周囲の盛り土にクロマツと広葉樹の混生防潮林をつくり津波に備える

赤牛漁池防潮堤 T.P. +9.8



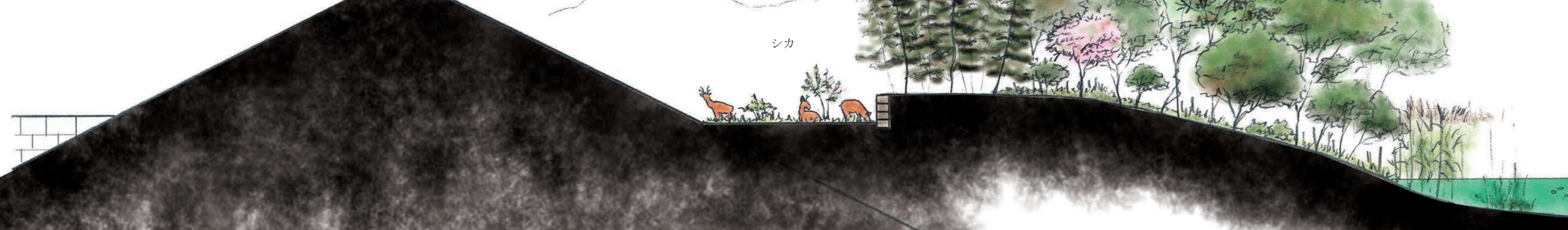
□100年後
津波が防潮堤を乗り越えるごとに池の水は汽水と淡水を往復し、海面上昇と地盤沈下につれて汽水の常態化に向かう
高さを増す防潮堤は池の自然環境と防潮林の再生プロセスを眺める視点場となる

防潮堤 T.P. +10.8

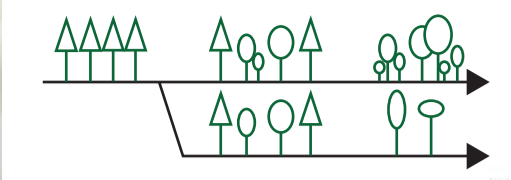


□500年後以降
海面上昇に抗い続ける防潮堤はさらに高さを増し、ラグーンとして完全な汽水環境となった池を鳥瞰する視点場となる
海と陸地のバッファーとして厚みを増したラグーンは津波に対するレジリエンスを最大限に発揮する

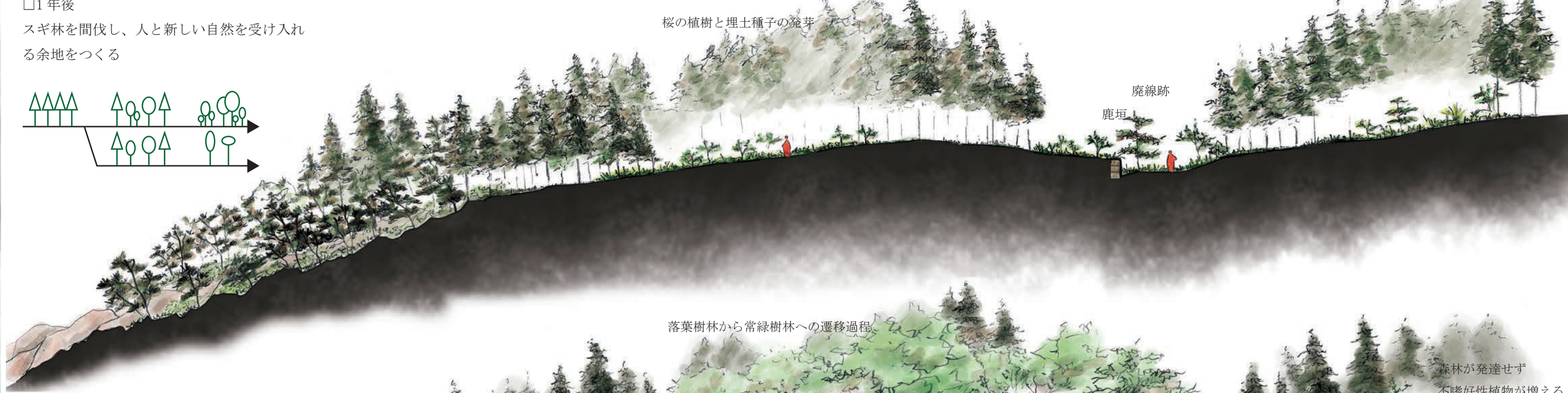
防潮堤 T.P. +14.8



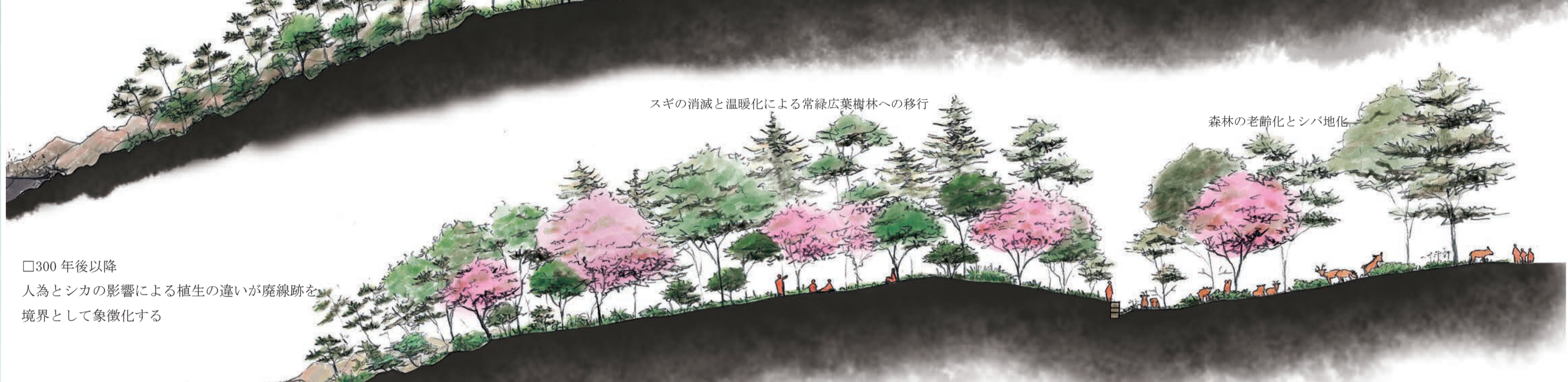
□1年後
スギ林を開伐し、人と新しい自然を受け入れる余地をつくる



桜の植樹と埋土種子の発芽



□100年後
植樹した桜と再生した自然植生が繁栄する一方、廃線跡の対岸ではシカの影響による新たな植生が形作られる



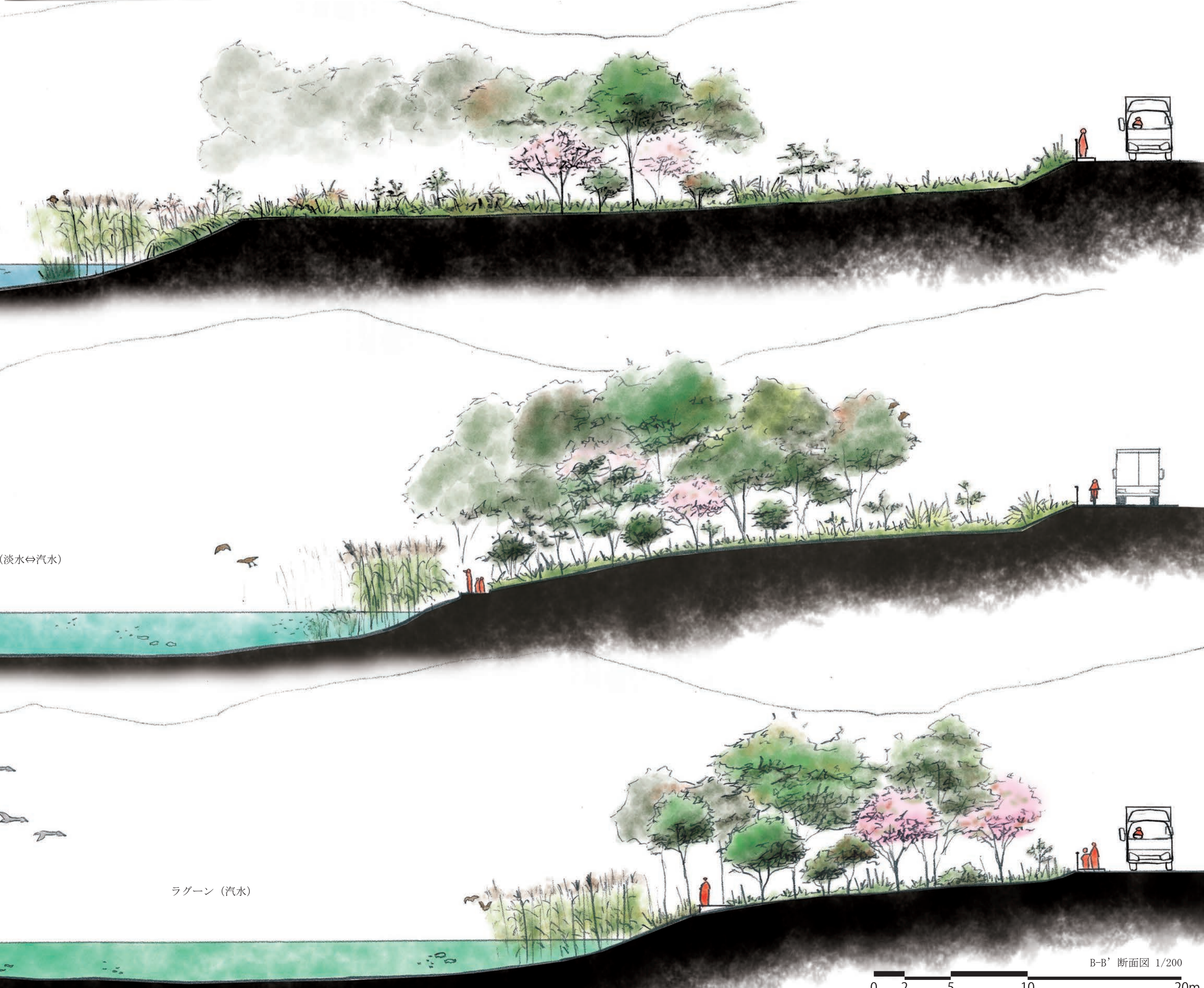
スギの消滅と温暖化による常緑広葉樹林への移行

A-A' 断面図 1/300
0 2 5 10 20m

□300年後以降
人為とシカの影響による植生の違いが廃線跡を境界として象徴化する



海面上昇



B-B' 断面図 1/200